

# 筑波大学日本文学会会報

第20号

1996年2月

紀三井寺紀行	稲垣泰一	一
日本文学会だより	.....	三
研究室だより	.....	四
卒業生だより	.....	七
日本文学会教官学生名簿	.....	九

## 紀三井寺紀行

稲垣泰一

ここ数年、と言ってもはや七、八年になるが、毎年夏休みの後半、研究仲間と一緒に京都醍醐寺に資料調査に出かけている。今年は八月十九日から二十二日までの三泊四日であった。資料の大半は室町時代から江戸時代にかけてのもので、醍醐三宝院流、当山派の修験道関係の文書や諸行事・作法に関する書物である。縁起類も多い。櫃に入った数十点に及ぶ資料の中から、依頼しておいた資料を点検しながら取り出し、それぞれ丹念にメモを取ったり、調査用紙に必要な事項を黙々と記していく間は、猛暑の世間とは隔絶した時間が流れている。

資料調査の緊張と興奮とは別に、もう一つの楽しみがこの行事にはある。最後の一日は醍醐寺を起点にハ文学散歩と称して、周辺の名所旧跡を巡る旅に出かけるのである。今年は一挙に和歌山に抜け、和歌の浦から紀三井寺・根来寺・紛河寺を周るドライブということになった。車は二台で、一台は同朋大学のW氏の運転、もう一台は筑波大学助手であった、仏教大学の坂井健君が買って出た。彼もハ文学散歩は大好きであるという。能・狂言の専門家、軍記物語の権威、仏教思想史の大家など、多士済々のメンバーなので、どんな所でも耳学問は事欠かない。我先にと己が教養を御披露してくれる。これがまたこの種の探訪にはありがたいのである。

二十一日、昼食を済ませた一行は高速道路を突っ走り、和歌山に向かった。その日は日前神宮・国懸神宮・淡嶋神社を巡る。晩には鮮魚の刺身で舌鼓をと期待したが、名産の湯浅（一説に『十訓抄』の編者とされる湯浅宗業の根拠地）の醤油とやらが微妙な甘さで、全くの台無し。関東の舌と関西の舌の違いを思い知らされる。良い経験。翌日は和歌の浦の玉津島神社に詣で、紀伊水道の広々とした海原を望む。その後は、遠く陸地の山腹に堂舎が見える紀三井寺に直行。途中、東照宮の立て看板を見ただけでも、意にもかけず参道付近を通過して、お土産屋が建ち並ぶ紀三井寺門前に乗り付けた。目の前には朱塗りの山門が高く聳え、裏手には急勾配の石段が真直ぐ這い上っている。蝉時雨の中を息を切らして上りつめると、左手正面に大きな観音堂が見える。西国三十三所観音霊場第二番札所である。堂内拝観の後、和歌の浦の入江が一望される、お堂前の広場で一休みする。見渡せば、広々とした海浜の眺望は実に爽快で、まさに絶景哉。吹く風に暑さも一時は忘れる。ふと見ると、坂井君は茶店に入って宇治金時をさくさく口に運んでいる。下り階段をおりる途中で、三井の湧水を見物し、一路車は八代將軍徳川吉宗の居城、和歌山城へと向かった（紀の川上流、根来寺・紛河寺の旅は省略）。

ところで、帰宅して数日後、紀三井寺が舞台となっていると仄聞した、漱石の『行人』を読んでみた。兄一郎と弟二郎、兄嫁の直、母親の四人が和歌の浦で泊った宿は、かつて私が一泊した旅館のように思われてくる（私は今回二度目の訪問）。兄一郎が二郎に兄嫁との関係を詰問される場所は、なんと今回通過した東照宮（権現様）の境内ではないか。紀三井寺では、あの見晴らしの良い展望休憩所のベンチで、二郎は兄一郎から、直と二人で和歌山見物に行くようにと口説かれ、しぶしぶ承諾する（近代文学専門の坂井君にはこのような講釈をしてもらいたかった）。漱石はこの場面を次のように記している。

自分達は……高い石段を一直線に上った。その上は平たい山の中腹で眺望の好い所にベンチが一つ据えてあった。本堂は傍に五重の塔を控えて、普通ありふれた仏閣よりも寂があった。

ふと、不審が頭によぎった。紀三井寺には五重の塔があったらうか。早速、紀三井寺参詣曼荼羅（桃山時代成立）を開いてみたが、五重の塔は描かれていない、紀三井寺に関する絵図をあれこれ繙いてみたけれども、どこにも存在しない。あるのは多宝塔である。多宝塔は文安六年（一四四九）に建立され、現在でも広場から見え、本堂右手奥に、木立ちに見え隠れして遠望された。果して漱石は紀三井寺に実際行って、この場面を描写したののだろうか。少なくとも正確な実景とは言えない。何かの間違いなのか。いろいろな想いが湧き上がってきたのである。

（平七・一一・二七）